

狩猟採集民オロチョン社会における定住と農耕開始の萌芽

—— 中国の大連図書館・魯迅路分館所蔵の資料を用いて ——

遠 藤 匡 俊*

キーワード オロチョン, 定住, 農耕, 狩猟採集, 中国北東部

I. はじめに

2005 (平成 17) 年 12 月 24 日～27 日に中国北東部の遼東半島の大連市にある大連図書館の魯迅路分館において、狩猟採集民オロチョン Orochon の集落に関する資料の所在調査を行ってきた。日本語で記された資料のなかに、狩猟採集活動によって主な食糧を獲得し移動生活をしてきたオロチョンが、農業を開始し定住生活を始めつつある頃の生活の一端を示す資料が含まれていたので報告する。

大連図書館・魯迅路分館には日本語で記された図書あるいは雑誌、地図、統計書などの文献 (以下、日本語文献とする) がかなり大量に保管されている。このような日本語文献のなかで小説などの文学作品については誰でも容易に閲覧することができるが、地図や地形、気候、人口、産業、民族、文化のことなどが記されている、いわゆる地理学的内容を含む文献等の閲覧にあたっては、中国人以外の外国人にとっては制約があるとのことであった。大連図書館所蔵の日本語文献のなかで満州国時代 (1932-1945) に出版あるいは作成されたものの多くは魯迅路分館に保管されている。今回の調査では事前に関覧許可を得る手続きを行わないまま訪問したが、同行した共同研究者が中国人であったこと、中国大連大学の研究者のご助力があったこと、魯迅路分館

の職員の方のご好意があったこと等によって、魯迅路分館に保管されているオロチョンの生活に関する日本語文献を閲覧し筆写することが可能となった。

オロチョンは、中国北東部の大興安嶺・小興安嶺周辺地域においてウマ (馬) やトナカイ (馴鹿) を飼育しながら狩猟採集生活をしてきた人々である。オロチョンは、オオノロ (通称ノロ) (*Capreolus pygargus pygargus* Pallas), シベリアエルクシカ (通称ハンダハン) (*Alces sices bedfordiae* Lydecker) などの動物を主な食糧とするために捕獲し、ホクマンリス (通称リス) (*Sciurus vulgaris mantcuricus* Thomas), マンシュウアカシカ (通称アカシカ) (*Cervus canadensis xanthopygus* Milne-Edwards) などを仕留めては交易品として用いていた (今西・伴, 1948a, 1948b; 今西, 1952)。オロチョンに対する定住化政策は、清 (1661～1911), 中華民国 (1912～1931), 満州国 (1932～1945) の各時代に実施されてきたが、オロチョンが本格的に定住生活を開始したのは 1950 年代になってからのこととされる (秋ほか, 1984; 王・関, 1999)。

本稿の目的は、狩猟採集活動によって主な食糧を獲得し移動生活をしてきたオロチョンが、それが一時的な現象であった可能性はあるものの、1931 年頃に農業を開始し定住生活を始めつつある頃の生活の一端を示す資料を紹介することである。

* 岩手大学教育学部地理学研究室 〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-33

II. 資料

資料として用いたのは、1932 (昭和 7) 年に出版された『黒龍江省土著族ノ由来考察』ニ関スル件』という書名の資料であり、日本語で記されている。著者は齊々哈尔 (チチハル) 領事の清水八百一である。この資料に記されている内容は、同年の 1932 (昭和 7) 年 9 月に出版され同じく魯迅路分館に保管されている日本語で記された『黒龍江省ニ於ケル風土及土著族ニ關スル調査』(外務省文化事業部編)にもほぼそのまま掲載されている。後者の『黒龍江省ニ於ケル風土及土著族ニ關スル調査』には、

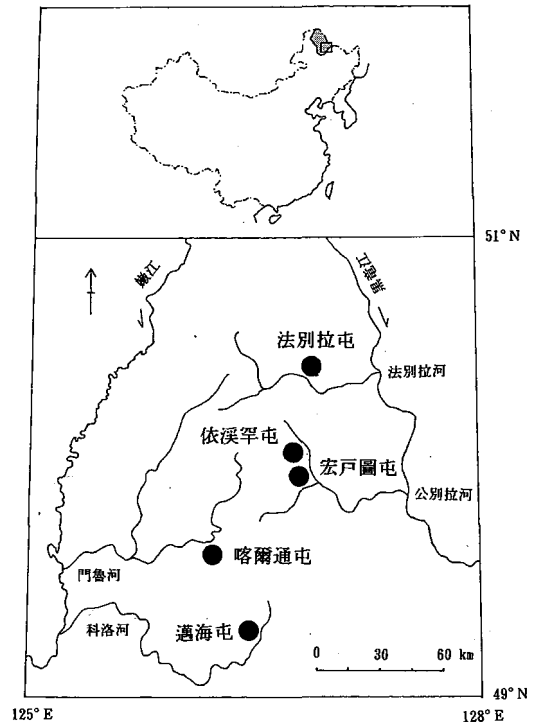
「本調査ハ在齊々哈尔帝国領事館ノ報告ニ係ル「黒龍江省風土誌略」及「黒龍江省土著族由来考」ノ二編ヨリナリ「黒龍江省風土誌略」ハ昭和六年三月八日ヨリ同六月十二日迄黒龍江民報ニ掲載セラレタルモノニシテ又「黒龍江省土著族由来考」ハ永ク興安嶺ニ居住シ直接該土著族ト往来シ居レル支那人周鎮南ナルモノノ起稿ニ係リ民國二十年四月脱稿セルモノナリ又該編中ノ鄂倫春人ニ關スル記事ハ別ニ中東經濟月刊ニ登載セラレタルモノヲ適宜挿入セリ」(外務省文化事業部, 1932)

とあることから、1931 (民国 20) 年に中国人の周鎮南が自らの調査によって作成したオロチョンの生活に関する内容を、齊々哈尔領事の清水八百一が採録してまとめたものが『黒龍江省土著族ノ由来考察』ニ関スル件』であると考えられる。そして同書の内容は外務省文化事業部 (1932) によって作成された『黒龍江省ニ於ケル風土及土著族ニ關スル調査』のなかにもほぼそのまま収録されたものと理解される。

III. オロチョンの集落の戸数

オロチョンの集落は、大興安嶺・小興安嶺周辺地域に分布しており (治安部参謀司調査課, 1939a,

1939b; 遠藤・張, 2004a; 張, 2006), 夏は河川の上流部へ移動し冬には下流へ移動しながら楕円を描いて谷を 1 年間に一周するという移動生活をしてきた (赤松, 1941)。この季節的移動によって、夏には各地に分散して小さな集落が形成され、冬には限られた場所に集合してより大きな集落が形成されることがあった (泉, 1937; 遠藤, 2006)。このように季節的变化や地域差があるものの、1900~1940 年の大興安嶺・小興安嶺周辺地域におけるオロチョンの集落は、総じて 10 戸以下の住居で構成されることが多かった (秋葉, 1936; 泉, 1937; 秋ほか, 1984; 張, 2004; 遠藤・張, 2004b)。



第 1 図 1931 年頃の庫瑪爾路において定住と農耕を開始したオロチョンの集落
アミは庫瑪爾路の地域的範囲を示す。
(『黒龍江省土著族ノ由来考察』ニ関スル件』により作成。庫瑪爾路の地域的範囲、および定住と農耕を開始していた集落の位置の推定にあたっては黒龍江省民族博物館の張政先生のご教示によるところが大きい。)

第1表 庫瑪爾路におけるオロチョンの所在地、姓、戸数、人口

地名	姓 別						戸数 (戸)	人口 (名)	家屋数 (棟)	学校数 (校)	既耕地数 (晌)
	莫尼西勒爾	谷拉伊勒爾	伍查罕	才臥西勒爾	韋羅力勒爾	車普哲依勒爾					
西力根奇河住民	9	2	3	4	2	20	61				
盤古河住民	6	6	3	8		23	77				
倭勒根河住民	14					14	67				
倭勒敦河住民	14	4		14		32	129				
西力根河住民	21	7		6	1	35	140				
白即河住民	1	1			3	5	26				
倭嫩河住民	5			1		6	18				
依沙奇河住民	7	2				9	41				
庫瑪河住民	9					9	25				
倭勒根河住民	11			3		14	55				
楚那河住民	2	1		4		7	26				
甘都勒河住民	1		1	8		10	43				
穆魯河住民		2	2	3		7	35				
卡拉邁河住民	7	1		5	7	20	73				
納邁河住民	13			5		18	94				
昂望河住民	2		5	3	2	12	48				
都魯河住民	6		8	1		15	61				
寬河住民	16	2		3	4	26	73				
托諾河住民					1	1	3				
色爾濱住民			4	1	2	7	28				
阿木爾噶奇河住民			2	1		3	16				
法別拉河住民			6		3	9	47	2			12
烏古薩力河住民			4			4	17				
依塗罕屯住民			6	2	1	9	43	9			26
宏戸圍屯住民			13	7	6	26	143	15	1		28
庫南河住民			2		2	4	13				
興安嶺西側住民		1	6	1	1	9	27				
西山ノ後方住民			1	1	1	3	9				
喀爾通屯住民		4	7	1		12	66	18	1		200
密奇力河住民		2	2			4	26				
霍爾們河住民			2			2	15				
倭烏爾河住民		1	1	1	1	4	14				
額爾河住民		4	1			5	23				
果力河住民			1			1	4				
莫落爾河住民		5	4			9	40				
們魯屯住民		1	2	2	2	7	25				
邁海屯住民		3	3			6	24	4			25
巴彥溝住民		3	2	1		6	18				
南河住民		1	2	1		4	21				
關爾芬住民		6	5			11	60				
關門山住民		1	1			2	13				
遜河住民			1			1	9				
烏都力河住民			2			2	9				
喋拉奇河住民		4				4	10				
對頭山住民		1				1	5				
努敏河住民				1		1	9				
歐肯住民		9	3	1		13	59				
那都爾住民			10		2	12	60				
合計	144	74	107	96	42	1	464	1,947	48	2	291

依塗罕屯は、第1図の依溪罕屯に相当する。
 (『黒竜江省土著族ノ由来考察』ニ関スル件』により作成。)

『「黒龍江省土著族ノ由来考察」ニ関スル件』には、庫瑪爾路という地域（第1図）に所属するオロチョンの所在地ごとに、性別の戸数、総戸数、人口、家屋数、学校数、既耕地数などが記されている（第1表）。例えば「西力根奇河住民」というように、西力根奇河流域という一つの河川流域がオロチョンの所在地としてとらえられており、オロチョンの所在地として48地名が記載されている。この48の地域的単位ごとに分析してみると、戸数が10戸以下の事例は66.7% (32/48) であり、5戸以下の事例は37.5% (18/48) である。同じ資料の『「黒龍江省土著族ノ由来考察」ニ関スル件』には、「同族カー一個處ニ群居スルトモ其ノ小屋数ハ四五戸ヲ越ヘス」（清水, 1932）とあることから、集落の戸数は多くても4~5戸程度という事例が多かったものと考えられる。

対象地域は庫瑪爾路地域よりも広域にわたるが1900~1940年の大興安嶺・小興安嶺周辺地域におけるオロチョンの52集落の事例では、戸数が10戸以下の事例は82.7% (43/52) であり、5戸以下の事例は38.5% (20/52) であった（秋ほか, 1984; 張, 2004; 遠藤・張, 2004b）。このようなことから、オロチョンの所在地として記載されている48地名は、一つの地名が一つの集落を意味する事例ばかりではなく、複数の集落を意味する事例を含む地域的単位であったと判断される。

同じ対象地域である庫瑪爾路地域におけるオロチョンの所在地ごとの戸数については、「通常十テント以下より成り、就中五テント内外のものが最も多い」（秋葉, 1936, 1941）という報告がある。ここでいう「テント」は、「住居」のことであると考えられ、この分析結果の根拠となった資料は、『黒龍江省ニ於ケル風土及土著族ニ關スル調査』（外務省文化事業部, 1932）である。

IV. オロチョン社会における定住・農耕開始の萌芽

1. 定住・農耕開始の萌芽

移動生活をしてきたオロチョンに対して、定住して生活することを勧めた定住化政策は、清（1661~1911）、中華民国（1912~1931）、満州国（1932~1945）の各時代にわたって実施されてきたが、オロチョンが本格的に定住生活を開始したのは1950年代になってからのことである（秋ほか, 1984; 王・関, 1999）。資料として用いた『「黒龍江省土著族ノ由来考察」ニ関スル件』には、それが一時的な現象であった可能性はあるものの、すでに1931年頃にはオロチョンが農耕を開始して従来よりも定住性がより高い村落が形成されていたことが記録されている。資料には、

「民國三四年頃朱慶瀾黒龍江督軍ニ就任スルヤ森林鑛山ノ開發ニ依リ群獸他處ニ遷去シ鄂倫春人ノ生計困難トナリ來レルヲ看取シ村落ヲ設ケ家屋ヲ建テ荒地ヲ發給シ屯墾ヲ教ヘ以テ彼等ヲ漸次狩獵ヨリ農耕ニ移ラシムヘク計劃セリ」（清水, 1932）

とある（資料1）。これは森林や鉱山の開発によって狩猟対象となっていた動物が他の土地へ移動してしまいオロチョンの生活が困難となってしまうので、定住性の高い村落を形成して農耕を営む生活へとオロチョンの生活を少しずつ変えていく計画が1914~1915（民国3~4）年頃に立案されていたというものである。1931（民国20）年当時には、

「目下同族ノ集合シ農耕ヲ為シ居ル部落左記ノ如シ」（清水, 1932）

のように、人々が集まって村落を形成して農耕を営んでいるのは、法別拉屯、依溪罕屯、宏戸圖屯、喀

爾通屯、邁海屯の5か所であった(第1表)。ただし、依溪罕屯については第1表において依塗罕屯と記されている。オロチョンの所在地として記された48か所のうち、この5か所においてのみ「家屋」がそれぞれ2棟、9棟、15棟、18棟、4棟ずつ設けられていた。ここでいう「家屋」がどのような建物であったのかは明確ではないものの、住居のことと考えられる「戸数」とはいずれも別に記されていることからオロチョンの住居とは異なる建物と判断される。さらに「既耕地数」としてそれぞれ12晌、26晌、28晌、200晌、25晌ずつ記されている。用いた資料に記された文字は「晌」(shǎng)と読み取れる。「晌」には、「ひる」という時を示す意味のほかに「一日に耕作できる面積」という意味もある。仮に記された文字が「晌」ではなく「垧」(shāng)であった場合には、「垧」は土地の面積の単位であり、1垧は東北地区では15畝(mǔ)に、西北地区では5畝に相当する。本稿の対象地域は東北地区に含まれると考えられ、1垧は約10,000.5平方メートルに相当する。

このように「家屋」が設けられ、「耕地」が既に開墾されていたことから、それ以前に比べてオロチョンの定住性がより高まったことが推測される。とくに宏戸圖屯および喀爾通屯には学校も設置されていたので、オロチョンの定住性はさらに高まっていたと推測される。

例えば、喀爾通屯の場合には

「依然狩獵ヲ為シ來リシモ宣統元年當局ノ勸説ニ依リ所轄佐領ハ附近ノ獵師ヲ集メ喀爾通地方ニ屯落ヲ作り家屋ヲ建テ数年間ニ耕地百数十晌ヲ開墾セリ」(清水, 1932)

とあるように、早くも清末期の1909(宣統元)年に村落が形成され「家屋」が建設されると数年間にわたって耕地が開墾されている。1931(民国20)年ころには学校も既に設けられていた。また邁海屯の場

合には清末期の1914(宣統6)年に村落が形成され耕地が開墾されている。

2. 定住・農耕開始の萌芽と集落の戸数

「家屋」が建設され耕地が開墾された法別拉屯、依溪罕屯、宏戸圖屯、喀爾通屯、邁海屯の5か所では、それぞれの住居が近接して分布する集村のような集落形態であった可能性が高い。それぞれ戸数は9戸、9戸、26戸、12戸、6戸である。とくに学校が設置されていた宏戸圖屯(26戸)と喀爾通屯(12戸)で戸数が多い。庫瑪爾路地域においては4~5戸という集落が多かったようであるが、複数の集落をも含む地域的単位である48地名の場合には、1地名あたりの平均戸数は9.7戸、平均人口は40.6人である。1931年当時において定住と農耕が開始されていた5か所では、平均戸数は12.4戸、平均人口は64.6人とわずかではあるが大きいという傾向がある。1900~1940年の大興安嶺・小興安嶺周辺地域におけるオロチョンの52集落の平均戸数が7.1戸であったことと較べても、集落規模は少し大きくなっている。定住と農耕が開始された時期がさらに溯って1909年と古い喀爾通屯においても1931年頃の戸数は12戸と少し大きめであるが、定住と農耕の開始時期が1914年と次いで古い邁海屯では6戸と少ないままである。

1931年以前であるか以後であるかによらず、このような定住性のより高い農耕村落が、一旦は形成された後にどの程度の期間にわたって存続していたのかについては明確ではない。

「同屯ノ鄂倫春人ハ家畜、農具及種子ヲ自辨シ墾殖ヲ開始セルカ毎年ノ收穫自食ニ足ラサル為屯民ハ漸次農ヲ罷メ獵ニ帰ルノ氣風アリ」(清水, 1932)

とあるように、自らの農業生産のみでは自給自足生活は難しく、農業を放棄して再び元の狩猟生活に戻ろうとする気風がみられた。そこで

「今若シ地代ヲ強徴スルトキハ屯民ノ生活困難トナリ将来ノ招撫上影響大ナルニ依リ地代ヲ免スルト共ニ喀爾通附近ノ荒地ハ屯民ニ払下ケ前例通り十個年間免税アリタキ」(清水, 1932)

のように、荒地の払い下げと10年間の地租免除などを請願している。同じような請願は、村落を形成して農耕を営んでいた法別拉屯、依溪罕屯、宏戸圖屯、喀爾通屯、邁海屯の5か所の全ての地域から提出されていた。

このようなことから1931年頃にオロチョン社会でみられた農耕を営む定住性の高い村落生活は必ずしも長続きはしなかった可能性が高い。当時のオロチョン社会は、定住と農耕が開始されつつある萌芽的な状態であったと推測される。

V. ま と め

オロチョン社会において本格的に定住生活が営まれるようになったのは1950年代に入ってからとされるが、1931年頃あるいは1909年頃にはその萌芽の状態が生じていた。移動しながら狩猟採集活動によっておもな食糧を獲得していたオロチョンに対し

て、清、中華民国、満州国などから定住生活や農耕・林業等を主体とする新たな生活を勧められた経緯は、日本において明治期にアイヌに対して実施された勸農政策(阿部, 1920a, 1920b; 高倉, 1934)と類似している。オロチョンとアイヌを対象として、それまで狩猟採集活動によって移動生活をしていた人々が農耕などを導入して定住生活に移行する過程を比較研究するうえで参考になる資料であると考えられる。

付 記

中国大連市における現地調査にあたってはいろいろとご協力いただきました大連図書館・魯迅路分館および大連図書館の職員の方々ならびに黒龍江省民族博物館の張政先生、大連大学の王禹浪先生に篤く御礼申し上げます。本研究では、平成17年度岩手大学学長裁量経費(海外調査旅費)および平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号: 20520676, 研究課題: 狩猟採集社会の定住・移動性と集団の空間的流動性に関する歴史地理学的研究, 研究代表者: 遠藤匡俊)を用いた。

(2008年7月1日 受理)

資料1. オロチョン社会における萌芽的な定住・農耕に関する記述

民國三四年頃朱慶瀾黒龍江督軍ニ就任スルヤ森林鑛山ノ開發ニ依リ群獸他處ニ遷去シ鄂倫春人ノ生計困難トナリ來レルヲ看取シ村落ヲ設ケ家屋ヲ建テ荒地ヲ發給シ屯墾ヲ教ヘ以テ彼等ヲ漸次狩獵ヨリ農耕ニ移ラシムヘク計劃セリ目下同族ノ集合シ農耕ヲ為シ居ル部落左記ノ如シ

1. 宏戸圖及依溪罕ノ兩屯

民國二年冬季興安嶺以西一帯ハ嫩江縣ノ管轄ニ帰セルニ依リ庫瑪爾路協領公署ハ同地域居住同路所属鄂倫春人ヲ興安嶺以東ノ瑯琿縣内ニ移シ四十五戸以上ノ一群ヲ一佐ト為シ八佐連結シテ屯墾ヲ為シタキ旨各佐領ニ通令セリ「鑛黃旗」ノ佐領來忠ハ所属鄂倫春人十餘名ヲ從ヘ率先瑯琿縣城ヨリ七十餘支里西山内ノ上流宏戸圖河附近ニ移住シ村落ヲ作り依溪罕河右岸ノ荒地ヲ取納シ農具家畜ハ自辨スルニ依リ一戸ニ付家屋建築費百留宛ノ補給及十個年間地租ノ免税方請願セリ省政府ハ之ヲ許シ宏戸圖及依溪罕ノ地租八十個年間免税シ且ツ一戸ニ付五十元宛ノ建築費二十戸分計千元ヲ發給セリ目下上記兩屯ニハ戸数三十五戸、人口百八十五名、家屋二十四棟及耕地五十餘晌アリ

2. 法別拉屯

民國三年六月「正白旗」ノ佐領察吉善ハ當局ニ向ヒ「同佐所属ノ鄂倫春人ハ從來ヨリ法別拉一帯ニ於テ狩獵ヲ為シ來レルカ今後ハ法別拉河北岸ノ烏河口以西ニ村落ヲ作り東ハ烏河ヨリ西ハ興安嶺迄約六十餘支里南ハ法別拉河ヨリ北ハ烏河迄約五十餘支里ノ空地ハ一佐ノ人民ヲ收容シ開墾スルニ充分ナルヲ以テ之カ拂下ヲ受クルト共ニ草屋一棟ノ建築費哈大洋四十元トシ二十棟分及家畜農具並種子ノ補給ヲ受ケ且ツ先例ニ倣ヒ十個年間地租ヲ免税アリタ

キ」旨請願セリ省政府ハ荒地ノ拂下及地租ノ免税ハ之ヲ許セルモ補助金ノ支給ハ財政困難ノ為却下セリ目下同屯ニハ戸数九戸、人口四十七名、家屋二棟及耕地十二晌アリ

3. 喀爾通屯

喀爾通屯ハ目下佐領保忠ノ管轄ニ帰シ居ルカ光緒年間興安嶺城撤廢後同地方鄂倫春人ハ佐領ト共ニ庫瑪爾路ニ移管セラレ依然狩獵ヲ為シ來リシモ宣統元年當局ノ勸説ニ依リ所轄佐領ハ附近ノ獵師ヲ集メ喀爾通地方ニ屯落ヲ作り家屋ヲ建テ数年間ニ耕地百数十晌ヲ開墾セリ同地方ハ民國初年嫩江縣ノ所管トナレルニ依リ同五年同縣ハ期限ヲ定メ地代ヲ取立ツルト共ニ附近ノ荒地ヲ拂下クヘク企圖セル處所管佐領ハ同縣ニ向ヒ「同屯ノ鄂倫春人ハ家畜、農具及種子ヲ自辨シ墾殖ヲ開始セルカ毎年ノ收穫自食ニ足ラサル為屯民ハ漸次農ヲ罷メ獵ニ帰ルノ氣風アリ今若シ地代ヲ強徴スルトキハ屯民ノ生活困難トナリ将来ノ招撫上影響大ナルニ依リ地代ヲ免スルト共ニ喀爾通附近ノ荒地ハ屯民ニ拂下ケ前例通り十個年間免税アリタキ」旨請願セリ翌六年一月當局ハ之ヲ許シ耕地ノ地代ヲ免除スルト共ニ荒地ニ井ヲ拂下ケ十個年後ニ徵稅スルコトセリ目下同屯ニハ戸数十二戸、人口六十六名、家屋十八棟及耕地二百餘晌アリ

4. 邁海屯

邁海屯ハ目下「正白旗」佐領察吉善ノ管轄ニ属シ其ノ状況喀爾通屯ノ夫レト同様ナリ宣統六年屯落ヲ作り家畜農具及種子ヲ自辨シ家屋ヲ建テ墾殖ヲ開始シ民國六年當局ニ向ヒ「邁海附近ニアル嫩江縣内ノ村落河北岸ニ荒地ニ井ヲ拂下ケ前例ニ倣ヒ十個年間地租免除方」請願セリ省政府ハ之ニ對シ「将来正式ニ拂下クヘキニ依リ屯民先ツ同處ニ到リ家屋ヲ建テ墾殖ヲ開始スル」様回答セリ目下同屯ニハ戸数六戸、人口二十四名、家屋四棟及耕地二十五晌アリ

(『黒竜江省土著族ノ由来考察』ニ関スル件)による。ただし縦書きであったものを横書きとして示した。)

文 献

- 赤松智城 (1941)：總説。赤松智城・秋葉 隆：『滿蒙の民族と宗教』。内外出版、1-53。
秋葉 隆 (1936)：大興安嶺東北部オロチョン族踏査報告 (一)。京城帝国大学文学会論叢、4、1-48。
秋葉 隆 (1941)：オロチョン族。赤松智城・秋葉 隆：『滿蒙の民族と宗教』。内外出版、55-157。
阿部正巳 (1920a)：十勝アイヌの保護沿革 (上)。民族と歴史、4、103-110。
阿部正巳 (1920b)：十勝アイヌの保護沿革 (下)。民族と歴史、4、153-159。
泉 靖一 (1937)：大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告。民族学研究、3(1)、39-106。
今西錦司 (1952)：『大興安嶺探検—1942年探検報告一』。毎日新聞社。
今西錦司・伴 豊 (1948a)：大興安嶺におけるオロチョンの生態 (一)。民族学研究、13(1)、21-39。
今西錦司・伴 豊 (1948b)：大興安嶺におけるオロチョンの生態 (二)。民族学研究、13(2)、42-61。
遠藤匡俊 (2006)：1930年代の大興安嶺南東部におけるオロチョンの命名規則—アイヌとオロチョンの文化に関する比較研究に向けて—。季刊地理学、57(4)、222-231。

- 遠藤匡俊・張 政 (2004a)：狩猟採集民オロチョンの集落研究に向けて。岩手大学教育学部研究年報、63、71-80。
遠藤匡俊・張 政 (2004b)：狩猟採集民オロチョンの集落の戸数規模。岩手大学文化論叢、6、95-104。
外務省文化事業部編 (1932)：『黒竜江省ニ於ケル風土及土著族ニ關スル調査』。外務省文化事業部。
清水八百一 (1932)：『黒竜江省土著族ノ由来考察』ニ関スル件。
高倉新一郎 (1934)：三縣時代に於けるアイヌ勸農策。法経会論叢、2、137-174。
張 政 (2004)：狩猟採集民オロチョンの社会構造の流動性—ウリレン(集落)構成の流動性のメカニズム—。岩手大学大学院教育学研究科・修士論文。
張 政 (2006)：20世紀前半における狩猟採集民オロチョンの社会集団の流動性とそのメカニズム。季刊地理学、57(4)、205-221。
治安部參謀司調査課 (1939a)：『滿州ニ於ケル鄂倫春族ノ研究 第一篇』。治安部參謀司調査課。
治安部參謀司調査課 (1939b)：『滿州に於ける鄂倫春族の研究 第四篇』。治安部參謀司調査課。
秋 浦・布 林・趙 復興・敖 榮綺・莫 金臣 (1984)：『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊・鄂倫春族社会歴史調査』。内蒙古人民出版社。

**Historical Materials on the Orochon Hunter-Gatherers
in the Bud of Sedentary Way of Life, Northeast China**

Masatoshi ENDO*

Key words : Orochon, sedentary way of life, agriculture, hunter-gatherers, northeast China

* Department of Geography, Faculty of Education, Iwate University, 3-18-33 Ueda, Morioka 020-8550, Japan